

文献紹介

木本雅康 著

『古代官道の歴史地理』

同成社 2011年8月 289頁 7,000円＋税

本書は、日本古代の官道について、歴史地理学の立場から考察された書であり、同成社の古代史選書の9として発刊されている。現在、古代道研究の歴史地理分野における第一人者である著者の1990年以降の事例研究論文がまとめられており、当該分野で久しぶりに得られた成果と言える。

著者が研究のまとめと今後の課題で述べているように、古代官道は、律令国家の様々な地域計画の基準線としても機能していた。つまり官道の復原は、律令国家の成立やその空間的支配を究明する鍵になるテーマなのである。しかし、歴史地理学における古代官道の研究者は少なく、直線的計画道の検出がほとんど行われていない地域も多い。近年の開発行為等により、その痕跡は急速に消滅しているため、早急な研究が必要とされる分野でもある。

このように、古代官道の復原を各地で進める必要性は依然として大きい。本書は、ある一地域の復原を歴史地理学的に行った単著論文により構成されている点で、上記の課題に応える成果と言える。以下に本書の構成を示し、続いて個別の内容を紹介していきたい。

- 序章 古代官道研究の成果と課題
- 第一章 宝亀二年以前の東山道武蔵路
- 第二章 下野国都賀・河内両郡における古代駅路
- 第三章 下野国那須郡を中心とする古代官道
- 第四章 下野国の古代伝路
- 第五章 出雲国西部の古代駅路
- 第六章 福岡県小都市西島遺跡5周辺の歴史地理—古代道路を中心として—
- 第七章 豊前国京都・仲津両郡における古代官道
- 第八章 肥前国彼杵・高来両郡における古代官道
- 終章 武蔵国中・北部における古代官道と鎌倉街道

序章では、古代官道研究の成果と課題として、研究史が整理されている。やや長くなるが、本書全体の内容と関わるため、詳しくみていきたい。まず、文献史学の立場から、駅路の制度史的な研究が行われ、続いて著者を含む歴史地理学による復元的研究が進められた。その結果、古代駅路が直線的に作られていた可能性が出てきた。さらに1990年代ころからは、考古学の立場から、発掘調査により遺構が各地で検出されているという流れが説明されている。

律令国家の交通体系は、駅制と伝馬制の二重構造になっていることが従来指摘されてきた。前者は駅家に置かれた駅馬を乗り継いでいくシステムであり、後者は地方豪族の固有の交通制度を再編成したものとされた。伝馬の道は歴史地理学の木下良氏により「伝路」と名付けられ¹⁾、著者も「伝路」のルートの復原を行ってきている。

しかし、文献史学による研究²⁾が進み、伝馬制は中央から地方へ下向するための制度であること、「伝路」は史料用語ではないこと、律令国家の交通制度は、駅制・伝馬制・伝制の三重構造と理解すべきであること、郡に付随した広汎な交通機能は伝であることなどが明らかにされてきた。その成果を受けて歴史地理学の中村太一氏は、官道を制度の三重構造のそれぞれに対応させ、駅路・伝馬路・伝路という三種類に分類し、復原を行った³⁾ことが紹介されている。

伝馬は本来、機械的に全郡に設置された可能性が高いと著者は指摘する。しかし、実態としては伝馬路の利用度には差があり、なかでも中央から地方へ一本の線のように連なる伝馬路がよく利用された。そのため、平安時代はじめての伝馬の廃止および再置や駅路の再編成を経て、『延喜式』における伝馬の設置状況となったと展望した。さらに、このような変化が、考古学の成果とも対応することも確認する。

序章の最後では、伝路研究の意義が述べられる。駅路一本で考えられてきた官道研究は、伝路を視野に入れることによって立体化する。また、駅路のルートについて複数の説がある地域の復原において、空間的な広がりや柔軟性が出ることに

なる。加えて、7世紀後半から9世紀もしくは10世紀の初めに姿を消す駅路に対して、伝路は大化前代の交通路を反映し、中世・近世の主要道に継続されていく傾向があり、復原に時間的な厚みも出ると説明している。

第一章以下は、各地の具体的なルートの復原研究となるが、まず、宝亀二年(771)に東山道から東海道に所属替えとなった武蔵国について、所属替え以前に使用された東山道駅路が復原された。武蔵国府から北へ5つの駅を結ぶルートで、発掘された道路遺構や地形、旧道、地名、遺跡などを検討して地図上で追った。

続く3つの章は、下野国に関する研究となる。第二章では、駅名の諸説や駅間距離の問題を考慮しつつ、都賀郡、河内郡における古代駅路の復原がなされる。下野国府を挟んだ三鴨駅、田部駅を中心に、駅の比定地と直線道の復原を進める際に、直線道路や渡河点の目標物や基準点も推定した。

第三章では、下野国北部の新田・磐上・黒川各駅間について、金坂清則氏による駅比定地⁴⁾を踏襲した上で、独自のルート復原を試みた。新田駅、磐上駅間では、源義家が通った道とされる「将軍道」を東山道と比定し、小字地名や切り通し状の地形、絵図などを駆使して道跡をたどった。

第四章では、下野国の伝路の復原が行われた。遺跡や瓦の出土地から各郡衙の位置を推定し、想定駅路から離れた郡衙や駅家を結ぶ道として、駅路とは別に伝路を想定している。また、那須郡衙、磐上駅を通る『延喜式』の駅路以前には、それらを通らずに、新田駅から黒川駅を直線的に結ぶ道が駅路であった可能性を述べた。

第五章は、『風土記』に記録が残されている出雲国西部の駅路の考察である。国府と同所と考えられる黒田駅から「立石」、「大道」などの交通路関連地名や、条里余剩帯、切り通しを伴う道路遺構、帯状の畑地、塞の神(道祖神)、地籍図などをもとに駅路が復原された。

以下3章は九州の官道についての研究となる。第六章は、肥前国基肄駅の想定地である福岡県小郡市の西島遺跡周辺の歴史地理について検討された。肥前国の北部に位置し、北は筑前国、東は筑後国の国境に近いこの周辺では、肥前国内西南方

面からの駅路と伝路、筑後方面からの駅路と伝路という4本の官道が復原された。

第七章では、豊前国の京都郡、仲津郡における駅路、伝路が復原された。発掘された道路状遺構に加えて、古代の駅家や駅路に沿って存在する「大足」や「大人足」などの巨人伝説にちなむ地名も参考にされている。また「ヒノクマ」地名が古代の烽にちなむ場合があることも触れられた。

第八章は、肥前国彼杵郡、高来郡の古代官道について、『延喜式』と『肥前国風土記』とで記載の駅数が異なることから、それぞれのルートについて考察された。さらに『風土記』には駅数が多く記録されるため、それらに仮に名前を付け、渡海駅を含めて比定を行った。西日本では直線道が現在道として残ることが少なく、多くは痕跡のみであるのに対して、この肥前国彼杵・高来両郡の場合は、古代駅路が現在も直線道として存続するところが多い常陸国との共通点が指摘された。その理由として、山がちな地形が集落の発達を遅れさせた点を挙げている。

これらの研究から、律令国家にとって西の辺境にあたる地域にも、計画的直線道がはりめぐらされていたことが示された。従来、駅路は、国府間を連絡することに第一義があるとされてきた。しかし、近年の研究により、駅路は7世紀第3四半期ころには、かなりの地域において整備されていたと考えられるのに対し、国府が本格的に整備されるのは、8世紀に入ってからであることから、駅路の方が先行すると考えられるようになってきている。駅路に沿わない国府も存在し、駅路の終点は必ずしも国府ではない。著者は、駅路の終点が城柵である陸奥国の例や、四国を一周した南海道の例、あるいは駅路が比較的標高の高いところを通ることも合わせて、駅路の軍事的意味を重要視する。この肥前国彼杵・高来両郡の場合は、現地調査から、有明海を臨むルートであることが確認され、単に陸路を見通すだけでなく、海上に対する警固の意味をもっていたとしている。

終章では、武蔵国の中部、北部における古代官道と鎌倉街道を比較した。それぞれの道路について復原を行った結果、古代駅路が中世以降の鎌倉街道にあまり踏襲されないこと、一部踏襲された場所では、現在まで痕跡を残していることを指摘した。また両者の間の王朝国家期については、注

意しつつ和歌文学史料を用いる研究方法を紹介している。

論文発表後の関連諸分野の成果については、補記として各章末尾に記されている。各地の遺構の新たな発掘事例は日々増加しており、研究に際しては、それらを把握し、これまでの成果の中に位置づけ直していく必要がある。本書の補記は、記載量が多くなっており、本文との整合性の点からはやや煩雑な記載という印象を受けるものの、最新の成果が丁寧に追記されている。

歴史地理学的手法のみによる復原は、仮説を提示するに過ぎないという限界を抱えている。しかし、発掘調査に先立ち官道の経路の推定を行うことは、研究の進展において重要である。近年、各地で発掘される道路遺構への注目度が上がってきている。その際、駅路から離れているために見過ごされる道路遺構が出ることを防ぐためにも、三重構造の官道の理解が定着することには意義があると紹介者も考えている。

あとがきによれば、著者が國學院大學在学中に木下良氏が同大学に着任され、著者は授業だけでなく、第一線のフィールドワークを学ぶ機会に恵まれたという。木下氏の伝統を受け継ぐフット

ワークの軽さは、古代史や考古学分野の研究者にも刺激を与えている。著者がすでに出版している古代道路に関する一般書⁵⁾も、古代官道研究への導入として、本書に合わせて参照いただきたい。

(山近久美子)

〔注〕

- 1) 木下 良「近年における古代道研究の成果と課題」人文地理40-4, 1988, 40-58頁。
- 2) 永田英明「律令国家における伝馬制の機能」交通史研究28, 1992, 1-25頁。市 大樹「律令国家交通体系における駅路と伝路」史学雑誌105-3, 1996, 353-375頁。馬場 基「駅と伝と伝馬の構造」史学雑誌105-3, 1996, 376-399頁。
- 3) 中村太一『日本の古代道路を探す 律令国家のアウトバーン』平凡社, 2000。
- 4) 金坂清則「下野国」(藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅱ』大明堂, 1978), 70-89頁。
- 5) 木本雅康『古代の道路事情』(歴史文化ライブラリー) 吉川弘文館, 2000。木本雅康『遺跡から見た古代の駅家』(日本史リブレット) 山川出版社, 2008。